笛吹市探訪

第57回 笛吹市の史跡⑯ 寺の前一号墳・狐塚古墳

市内には、古墳が非常に多く残っており、「笛吹市探訪」シリーズでも、これまで何度かご紹介してきました。今回は、春日居町にある寺の前一号墳と狐塚古墳を取り上げます。

春日居町には大蔵経寺（だいぞうきょうじ）山と吾妻屋（あづまや）山に挟まれた斜面に41カ所の古墳が確認されています。これらは春日居古墳群と呼ばれており、寺の前一号墳と狐塚古墳はその中にあります。

寺の前一号墳は、春日居町鎮目にありますが、開墾により古墳自体は消滅してしまいました。しかし、聞き取り調査などから、横穴式石室を有する小規模な円墳であったのではないかと推測されています。

古墳の中から発見された物には、須恵器（すえき）や武器・馬具類、そして銅鋺（どうわん）などがあります。発見された物の時代から、古墳は7世紀の中頃から末頃に造られたと考えられています。

銅鋺（寺の前一号墳）

狐塚古墳は、春日居町鎮目にある横穴式石室を有する円墳で、寺の前一号墳の西約50メートルに位置しています。古墳の規模は、直径15メートル、高さ3メートルです。明治時代に地元の方が発掘し、須恵器や馬具、そして銅鋺などが発見されました。発見された物の時代から、古墳は6世紀後半に造られ、7世紀後半まで追葬（一度葬った後、同じ古墳に違う人を葬ること）されていたと考えられています。

狐塚古墳

これら二つの古墳の注目する点は、銅鋺が発見されていることです。銅鋺は、県内では5点見つかっていますが、今回取り上げた寺の前一号墳と狐塚古墳で、二つの銅鋺が見つかっています。これにはどんな意味があるのでしょうか。

銅鋺は、もともと仏教の道具として使用されたものと考えられています。したがって、銅鋺が出土したことによって、山梨県の古墳文化にも仏教が入り込んだと考えることもできます。

しかし、全国で発見されている銅鋺の多くは古墳から出土しており、古墳との強い関わりが指摘されています。副葬品（ふくそうひん）として納められた生前の愛用品である可能性もあります。

また、両古墳に隣接する寺の前三号墳では、大刀（たち）の柄の先に装着する装身具が発見されています。鳳凰（ほうおう）がデザインされており、銅鋺と合わせて山梨県においては大変珍しい物です。おそらく、春日居町地域の豪族のリーダーが所有していたものと考えられます。

今回ご紹介した古墳は、6世紀後半から7世紀後半頃の古墳であり、古墳の眼下には7世紀後半に建立された山梨県最古級の寺本古代寺院があります。もしかしたら、今回ご紹介した古墳に埋葬された人々は、寺本古代寺院の建立に大いに関わっていたのかもしれません。

今回ご紹介した銅鋺は、現在春日居郷土館で展示されていますので、ぜひご覧ください。

環頭大刀柄頭（寺の前三号墳）